國學院大學学術情報リポジトリ

一 研究の意義：三陸地域にみる文化的レジリエンスの人類史的意味

メタデータ	言語: Japanese
	出版者:
	公開日: 2024-10-31
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者: 古沢, 広祐
	メールアドレス:
	所属:
URL	https://doi.org/10.57529/0002001079

第一部　研究成果の概要

―現地調査論考編―

一　研究の意義

―三陸地域にみる文化的レジリエンスの人類史的意味―

古沢広祐

豊かな自然・伝統文化を育んできた東北地方、三陸地域一帯は、祭りや、神楽などの郷土芸能が人々の日々の暮らしと深く結びついて継承されてきた地域である。これまで過去のものとして忘れ去られてきた伝統文化、とりわけ地域社会が継承する歴史・文化的な蓄積が、巨大災害を契機によみがえってきた動きは大変に興味深い。復興への歩みが進行し、徐々に日常を取り戻してきたが、見えない形での困難を抱える厳しい現実も続いている。高台移住、巨大防波堤の建設などハード面での復興が話題になる一方で、ソフト面の人々の暮らし・コミュニティ・文化面での再建の重要性があらためて注目され、評価されてきている。

東北地方は、かねてから伝統芸能や祭事などが人々の暮らしと深く結びついて脈々と引き継がれてきた地域である。厳しい気候風土の東北地方は冷害や凶作に苦しんできた土地柄から、人々の自然への畏敬の念は深いものがある。多くの祭事は、厳しい自然のなかでの飢饉、疫病、災害などによる人々の苦難、尊い生命が失われた出来事などに対する、鎮魂や供養といった鎮めの意味をもっていた。人々の暮らしの根っこに深く関わって祭事があり、村々に民俗芸

能いわゆる郷土芸能が継承されてきたのであった。

人々の暮らしの根っこに深く関わって祭事があり、村々に民俗芸能いわゆる郷土芸能が継承されてきた事実に、震災後に三陸地域を訪れてあらためて実感させられた。訪問先の各地で、神楽、虎舞（とらまい）、鹿踊（ししおどり）、獅子舞（ししまい）、剣舞（けんばい）などに接したが、そこに秘められていた力をまさに実感することができた。深刻な津波災害を受けた地域で催された行事、舞う人も、観る人達も、すべてを流された人々が集う場において、そこでの舞いの姿には、過去や現在の鎮魂の想いが二重写しのように表出していた。復興を祈願し催される祭事、そこに参集する人々の様子には、魂の深層に引き継いできた共感が甦り、心を動かされ、まさに感動の涙と笑顔が交錯するような一体感が醸成されていたのだった。

こうした個が共同・歴史性の中で結束と社会形成に繋がりうるポジティブな側面とともに、結束自体が足かせとして作用する側面もあり、多様な展開としては注意しておきたい点である。

震災後、継続的に訪問・調査してきた地域の人々の対応状況、そこでくり広げられる諸活動の事例を通して、社会形成に関する学ぶべき事柄が数多くある。それは、人間存在の在り方や日本社会の姿を見直す意味でも、また広く世界や人類史的な視点から見ても注目すべきものであり、一種の文化的レジリエンスのあり方への示唆を与えている。

文化的レジリエンスに関しては様々なアプローチで研究が行われているが、本研究との関連ではとくにソーシャルキャピタル（社会関係資本）の分析視点が重要だと考えている。ソーシャルキャピタルの二つの構成要素である結束型と橋渡し型の関係形成が、被災地での災害対応や復興過程でのコミュニティ形成においては、多様で複層的な展開が垣間見られた。それらの内容検討に関しては未調査部分も多く今後の課題としたい。

いずれにしても被災後十年を経過して地域差も生じてきている状況下ではあるが、地域社会が内包する文化的レジリエンスの諸側面に関しては、今後とも継続的に研究をすすめて行きたい。